シンクタンク通信
Dana⌒Tex
～架け橋～
VOL.6

◎発行元◎
大阪市総合教育センター
教育振興担当
調査分析グループ

◎発行日◎
令和７年９月１日

不登校の実態把握と対応策の検討Ⅰ
～「令和５年度 大阪市子どもの生活に関する実態調査」の分析より～

昨年度、調査分析グループでは「不登校の実態把握と対応策の検討Ⅰ」と「学力向上に向けた児童のつまずきの把握Ⅰ」をテーマに研究を行いました。

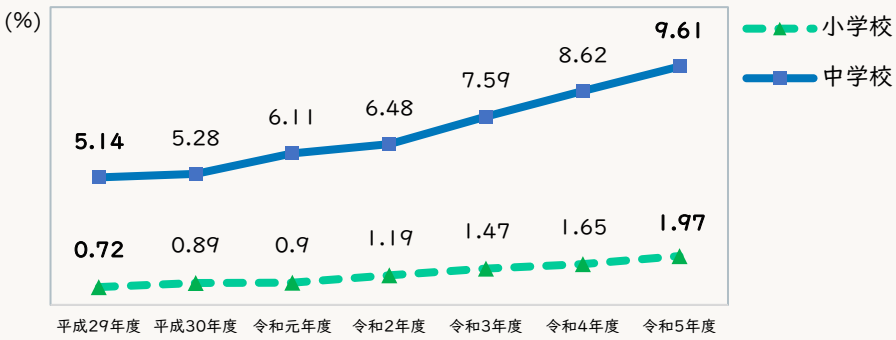
本号では、「不登校の実態把握と対応策の検討Ⅰ」の研究内容について概要をお伝えします。詳細は、総合教育センターのホームページに「大阪市総合教育センター 研究紀要 第１号」として掲載していますのでご覧ください。

https://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000651/651064/20241.pdf

本市の不登校児童生徒数は全国同様増えており、対応策が喫緊の課題となっています。本研究「不登校の実態把握と対応策の検討Ⅰ」では、「令和5年度 大阪市子どもの生活に関する実態調査」のデータを用いた分析を行いました。

背景

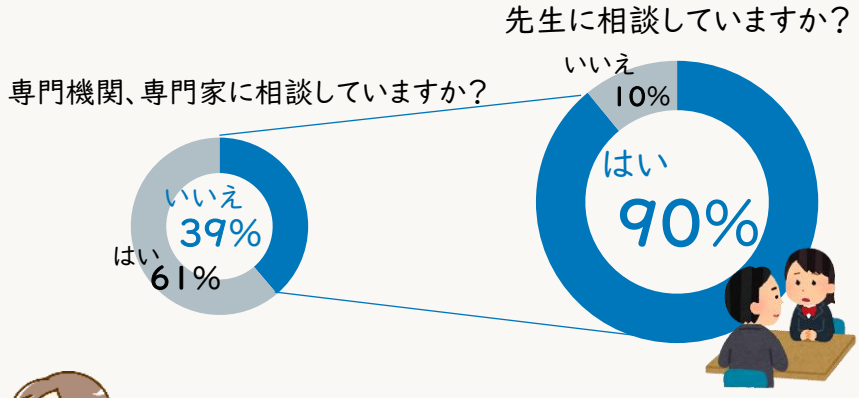
【大阪市 不登校在籍比率】



大阪市の不登校在籍比率は、平成29年度から令和5年度にかけて小学校が約3倍、中学校が約2倍に増加しています。小学校では約50人に1人、中学校では約10人に1人が不登校と概算されます。

『H29～R5 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』

【不登校児童生徒の相談先】



専門機関・専門家*に相談していない不登校児童生徒は39%おり、そのうち90%は先生を相談先としています。

*教育支援センター、教育委員会所轄の機関、児童相談所、福祉事務所、保健所、精神保健福祉センター、病院、診療所、民間団体、民間施設/養護教諭、スクールカウンセラー、相談員

『R5 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』

先生が重要な存在になっている！

『学校で気付ける不登校へのサイン』とは？

方法

不登校*児童生徒の行動特徴についての分析を行いました。大阪市在住の小学5年生、中学2年生を対象としています。解析はロジスティック回帰分析を用いました。

*本調査では不登校を保護者向け調査票における「通学状況」において、年間欠席数が30日以上と答えた世帯としました。

結果

※表1・2 登校状況別にみた学校や生活上の行動（合計21,265世帯）　世帯数（%）を示す。
※ロジスティック回帰分析やオッズ比の詳細については、シンクタンク通信vol.3「非認知能力の育成に向けて」をご覧ください。

表1. 小学生の不登校特徴

項目	小学生（11,303世帯） 登校児童（11,155世帯）	不登校児童（148世帯）	オッズ比
保健室で過ごすことが多い	90(0.8)	12(8.1)	5.56
宿題ができていないことが多い	792(7.1)	41(27.7)	4.12
習い事を休むことが多い	231(2.1)	15(10.1)	3.09
友達と遊んだり，おしゃべりしたりする時間が少ない	587(5.3)	24(16.2)	2.62
持ち物の忘れ物が多い	2,150(19.3)	34(23.0)	0.55

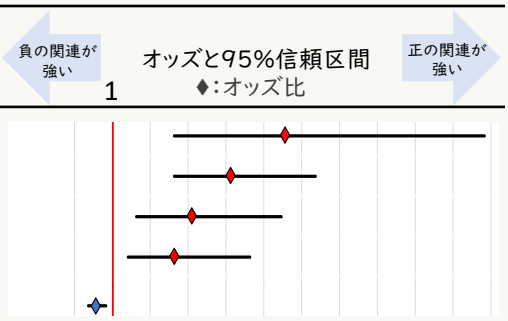
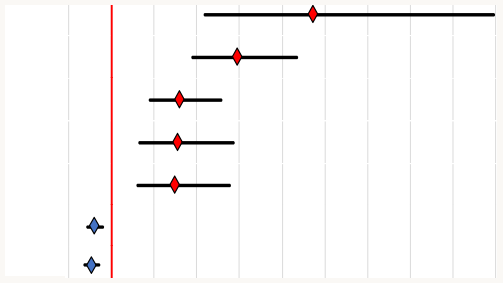


表2. 中学生の不登校特徴

項目	中学生（9,962世帯） 登校生徒（9,668世帯）	不登校生徒（294世帯）	オッズ比
保健室で過ごすことが多い	74(0.8)	22(7.5)	5.73
宿題ができていないことが多い	1,147(11.9)	122(41.5)	3.94
習い事を休むことが多い	275(2.8)	34(11.6)	2.60
友達と遊んだり，おしゃべりしたりする時間が少ない	581(6.0)	54(18.4)	2.55
提出物を出すのが遅れることが多い	1,577(16.3)	155(52.7)	2.48
授業中に寝てしまうことが多い	1,732(17.9)	58(19.7)	0.59
持ち物の忘れ物が多い	1,444(14.9)	68(23.1)	0.52



POINT

小学生も中学生も「保健室で過ごすことが多い」「宿題ができていないことが多い」の項目において、特に不登校の特徴との関連が強く見られました。先生方の「経験や勘」として、「頻繁な保健室の利用や課題の出し忘れ等が不登校と関連があるのでは？」と感じていたことが、データから裏打ちされたのではないでしょうか。

まとめ

分析結果より、不登校児童生徒に共通して見られる特徴的な行動として、**「保健室で過ごすことが多い」「宿題ができていないことが多い」**の項目との関連が強く見られました。この結果は、令和2年度に文部科学省が実施した「不登校児童生徒の実態調査※」とも同じ傾向です。このことから、**欠席日数が多い児童生徒に対する教職員間の連携や声掛け、また学習に困難を感じている児童生徒への学習支援が重要**だと考えられます。

夏休みが終わり、子どもたちの気持ちや行動にも大きな変化が見られる時期です。今回のデータ分析により裏打ちされたことで、「不登校へのサインかも」という思いで子どもたち一人一人に寄り添い、声掛けを工夫したり、保護者との連携を密にしたりするなど、行動の変化に繋げていきましょう。

（※）令和２年度「不登校児童生徒の実態調査」（文部科学省）https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318-2.pdf
「最初に学校に行きづらいと感じ始めたきっかけ」として、小学校では26.5%、中学校では32.6%の児童生徒が「身体の不調」、また「最初のきっかけとは別の学校に行きづらくなる理由」として、小学校では31.4%、中学校では41.8%の児童生徒が「勉強が分からない」と回答しています。